

竹林整備をスポーツとして!

㈱テサキ製作所 代表取締役 手崎 貴之

最近、竹害とか竹林の駆除とか言う言葉を耳にします。竹の旺盛な繁殖力が雑木林を侵食し田畑にまで進出し害を与えていることを指すらしいのです。竹は昭和30年代までは、農

竹害は人間の都合で起こるべくして起こったものです。しかし、この竹の繁殖力と成長力は、いま問題となっている二酸化炭素を大量に吸収しているのです。しかも、数年というサイクルで成長を繰り返します。竹林は二酸化炭素吸収体としては何よりも優れたプラントです。企業がスポーツを応援するように「竹林整備スポーツ」として捉え、企業の地元地域

存在する放置竹林を整備する人々たちを応援します。また、「炭焼き同好会」等も設立して間伐した竹材を炭にすれば炭素はこれで固定されます。その竹炭を土壌改良剤等として農業に使う、建築時の埋設炭として床下調質炭に使って排出した二酸化炭素を地中に隔離したことになります。この様な一連の取り組みを

仁淀川と私(川も年老いて行く)

完オゾ協議会事務局長 尾崎 安國

には、幼虫期にエノキを食草として雑木林に生息するオオムラサキ、幼虫期の5〜8年を水流で過ごし水際の植物類部やコケ類に産卵するムカシトンボ等の昆虫類、魚食性の山蟬や水生昆虫食のカワガラス等の鳥類、冷水域を好むアマゴ、タカハヤ等の魚類等、清冽な溪流を代表する生物が沢山生息していた。中流域の両岸には、水際にツルヨシ

ミ、水際を歩きながら昆虫等採取するセキレイ等鳥類の採餌環境が広がり、空には鷹や鷲が舞っていた。小さい頃は子ども同士で、夏は川で魚を捕ったり泳いだり、冬はすぐ裏山に入り奥深く侵入し鳩やヒヨドリを取る罠を掛けたりして遊ぶのが口課だった。今66歳を迎えるが、この仁淀川の自然は地球が我々に与えてくれた尊い宝物だと思ふ。(私は仁淀川と云ったが、どこの川も同様だと思ふ。)

わたれおり、四国全体ではその内の約3.2%の約5億2、800万tが使用されていることになる。平均的な一般家庭における生活用水の使用状況、一番多いのがお風呂の約4%、台所・洗濯と順に少なくなっている。四国管内で毎日お風呂に入ると仮定した場合、使用量は一般家庭で約99%の1億7、900万t、温泉・社会福祉施設等では約1%の204万t、合計年間約1億8、100万t捨てられていることになる。これを、上下水道料金500円/m³と仮定すると年約900億円となり、再利用

仁淀川(よどがわ)と読むが、語源は判らない。私は、この仁淀川のほとりの村で育ち、大きくなった。その頃は、仁淀の上流域の溪流部

の群落が多く茂り、その外側に樟の木、榎木、ヤナギ類、竹林等の河畔林があり、ヤナギ類には、幼虫コムラサキ。河原にはカワラバタ、砂レキ地にはイカルチドリやヒバリが生息する。私が育った流域では、瀬や淵が連続する場所にアユ、ウグイ等の魚類、水面や水際は主に魚食性であるカイツブリ、カワウ、サギ類、カワセ

組みのままでは3年たっても永続的な経済の回復は困難である。地球温暖化、資源枯渇、食料危機等の人間社会を破壊に導きかねない大きなピンチが控えている。人類が生き続けるためには、現状社会を成長・利益中心から早期に持続可能性中心に変えていかねばならない。それは今までの社会とは全く違った道であり、環境革命ともいえる社会の大転換が必要である。

川は生き返る：オゾン、これからの環境社会に必要な

持続可能社会への大転換が大きなチャンスに

環境カウンセラー 谷川 璋一

回りにも深刻な不況の影響が押し寄せている。私たちはこれに耐えて生き続けていかねばならない。今回の危機の根本原因は金

ている。そこには今までになかった大きなチャンスが存在する。これを探し・育て・広げていく努力こそが、私たちが生き続けるための道である。「ピンチはチャンス」は弱気を強気に変える励ましという言葉である。ことわざの法則によろその言葉を繰り返す口ずさむことにより、そのことが自然に実現するといわれる。チャンスの神様はそれを

自分が使用する電気は、太陽光発電で NPO法人 エコロジーひろしま 一般(株)広島県高齢者サポートセンター 理事長 小島 實



物価値観の中心とする社会構造がある。

球環境を無視した社会の行き

低炭素社会の実現と経済対

部科学省、環境省は太陽光発電導入拡大のアクションプランを発表しました。一般住宅の太陽光発電設置導入においても補助金制度を実施するとの発表もあり、21年度は今まで停滞していた太陽光発電の普及が大きく進展するのでは